

令和 8 年 2 月 19 日

大阪市総合教育センター
教育振興担当 実践研究グループ
首席指導主事様

研究コース	
A グループ研究A	
校園コード (代表者校園の市費コード)	
721639	
選定番号	150

代表者	校園名:	新北島小学校
	校園長名:	武知 広幸
	電話:	6683-3011
	事務職員名:	沓拔 雅司
申請者	校園名:	新北島小学校
	職名・名前:	校長 武知 広幸
	電話:	6683-3011

令和7年度 「がんばる先生支援」 報告書

◇「がんばる先生支援」について、次のとおり報告します。

1	研究コース	コース名	A グループ研究A	研究年数	継続研究 (2年目)								
2	研究テーマ	ポジティブ行動支援 (PBS) を土台とした学校経営 ～子どもたち・教職員・保護者・地域と共に～											
3	研究目的	<p>① ポジティブ行動支援を学校経営方針に組み込み、児童の自尊感情を上げる。 ※令和6年度の大阪市学力経年調査では「自分にはよいところがある」の項目における肯定的回答が大阪市比で3年生は-9.8ポイント、4年生は-6.0ポイント、5・6年生は大阪市平均を超えるという結果になった。学年によって差があるという結果は、担任による支援の差でもある。どの学級、どの学年においても同じように自尊感情をあげる取り組みを行い、学校全体として自尊感情を上げる。また、その取組を家庭や地域にも広げ、学校以外でもポジティブ行動支援の枠組を使った支援を行う。</p> <p>② 教職員に対してポジティブ行動支援の枠組を用いて、ストレス値を下げる。 ※昨今、教職員のバーンアウトが課題となっている。教職員に対してポジティブ行動支援を行うこと (行動目標を明確に示させ、そのヒントや手本を例示し、できた行動に対するポジティブフィードバックをする) で、教職員の働き方の充実を図り、ストレス値を下げる。</p>											
4	取り組んだ研究内容	<p>いつ、何のために、どのようなことを実施したのかを具体的に記載してください。(MSチェック 9.5※イント)</p> <p>① 児童の自尊感情を高めるために、学校の教育目標に連動した学級目標 (生活指導面) を行動目標として児童に明示し、ポジティブフィードバックを意識したスクールワイドポジティブ行動支援を実施することができた。</p> <p>1) 学校教育目標に連動する学級ごとの「そうじ」について行動目標が作成できた。 2) 1で決めた行動目標を実現しやすくするために児童会によるお手本ビデオの作成ができた。 3) 行動目標が実現できた際のポジティブフィードバックが学校規模で行えた。 4) 支援前と支援後の変容について、集計と開示、教職員の振り返りの会議がもてた。</p> <p>※児童アンケート (9月→1月実施結果より) 「自分にはよいところがあると思いますか」 肯定的回答の割合 84%→85%</p> <p>② 校長主催による外部講師を招聘した校内研修が合計9回実施できた。そこで得た知識や方法を自学級で実践することにより、子どもの成長を感じられたり (17名)、自己実現できたり (17名) と、教職員のウェルビーイングが向上した。</p> <p>1) 校長主催の校内研修が年間6回実施できた。 2) 校長とメンター共同の校内若手研修が年間3回実施できた。 3) 大阪教育大学大学院で2回実施の「エビデンスベースの学校改革研修」に4名が参加できた。 4) ポジティブ行動支援の枠組みを用いた教職員に対する支援が行えた。</p> <p>※2025年度ストレスチェック集団分析結果 ストレスチェックの「上司からの支援」 (高いほど良い) が、8.4/10 (大阪市8.2/10) になった。 ストレスチェックの「同僚からの支援」 (高いほど良い) が、9.2/10 (大阪市8.7/10) になった。 総合健康リスク (低いほど良い) が、76/100 (大阪市87/100) になった。</p>											
5	研究発表等の日程・場所・参加者数	<p>研究発表等を実施した日・場所・参加者数を記載してください。</p> <table border="1"> <tr> <td>日程</td> <td>令和 8 年 2 月 10 日</td> <td>参加者数</td> <td>約 73 名</td> </tr> <tr> <td>場所</td> <td colspan="3">新北島小学校</td> </tr> </table>				日程	令和 8 年 2 月 10 日	参加者数	約 73 名	場所	新北島小学校		
日程	令和 8 年 2 月 10 日	参加者数	約 73 名										
場所	新北島小学校												

	参加者数	備考	Teamsによるオンラインの研究発表
--	------	----	--------------------

6	成果・課題	<p>大阪市教育振興基本計画に示されている、「子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力」の育成および「教員の資質や指導力」の向上について、申請書に記載した検証方法から得られた結果と、それらからの結果に基づいた考察を、具体的に記載してください。</p> <p>【見込まれる成果1】</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力」の育成</p> <p><input type="checkbox"/> 「教員の資質や指導力」の向上</p> <p>児童に対して行動目標を明確に示し、行動しやすい環境を設定し、ポジティブフィードバックを行うというポジティブ行動支援の取組を様々な場面、様々な学級で行うことで、子どもたちの自尊感情が上がる。</p> <p>《検証方法》</p> <p>令和6年度大阪市小学校経年調査で「自分にはよいところがある」の肯定的回答が学年によりまちまちで、平均すると大阪市平均を下回っていた。このことを受けて、令和7年度大阪市小学校経年調査における同項目を3～6年生で80%以上、大阪市比100%以上に上げる。</p>
		<p>[検証結果と考察]</p> <p>令和7年度大阪市小学校経年調査の「自分にはよいところがある」の肯定的回答は、3年生78%（大阪市84%）、4年生80%（大阪市81%）、5年生74%（大阪市80%）、6年生89%（大阪市82%）となった。6年生が大阪市平均を超え、2学年が80%を超えたが、大阪市比では100%に及ばなかった。担任による指導や支援が大きく数値に反映しているので、低い数値の学年には個別の支援や指導が必要である。また、単発（2週間単位のキャンペーン）のスクールワイドポジティブ行動支援ではなく、常時行えるように「行動マトリクス」の作成が急がれる。</p>
		<p>【見込まれる成果2】</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力」の育成</p> <p><input type="checkbox"/> 「教員の資質や指導力」の向上</p> <p>「楽しく学べる算数教材」の導入と子どもたちが成果を感じられるポジティブ行動支援の枠組を用いた学習支援により、算数科における「主体的に学習に取り組む態度」を上げる。</p> <p>《検証方法》</p> <p>令和7年度大阪市小学校経年調査「算数が好き」という項目における肯定的回答を3～6年生で60%以上、大阪市比95%以上に上げる。</p>
		<p>[検証結果と考察]</p> <p>令和7年度大阪市小学校経年調査「算数が好き」における肯定的回答は、3年生82%（大阪市77%）、4年生54%（大阪市67%）、5年生56%（大阪市61%）、6年生52%（大阪市58%）となり、3年生は大阪市平均を超えることができたが、他学年は大阪市平均を超えることができなかった。また、3年生以外は大阪市比95%にも届かなかった。これは、算数教材の使用が単発の取り組みになることが多く、継続的な取り組みが足りなかったことによるものであると考えられる。</p>
		<p>【見込まれる成果3】</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力」の育成</p> <p><input type="checkbox"/> 「教員の資質や指導力」の向上</p> <p>令和7年度の学校経営方針にポジティブ行動支援の考え方を組み込み、学校全体の教育目標をその考え方のもと設定する。これを土台とした生活目標の設定により、学校みんなで子どもたちを「褒める・認める」風土が醸成されると考えられる。</p> <p>《検証方法》</p> <p>PBSアンケートの「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」「学校のきまりを守っている」という2項目における肯定的な回答の割合を、ポジティブ行動支援取組前と後で比べたとき、取組後の割合を両項目共に2ポイント以上上げる。</p>
		<p>[検証結果と考察]</p> <p>PBSアンケートの「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」という項目における肯定的な回答の割合は、ポジティブ行動支援取組前と後を比べたとき、1年生では93%から94%、2年生では93%から89%、3年生では82%から84%、4年生では87%から95%、5年生では84%から91%、6年生では89%から87%となり、6学年中4学年で上がった。また「学校のきまりを守っている」という項目における肯定的な回答の割合は、1年生では83%から98%、2年生では89%から93%、3年生では80%から86%、4年生では87%から91%、5年生では87%から89%、6年生では87%から84%となり、6学年中5学年で上がった。具体的な行動目標の設定が、児童を望ましい行動に導き、教職員も「褒める・認める」ことがしやすくなるということがわかった。</p>

6	成果・課題	<p>【見込まれる成果4】</p> <p><input type="checkbox"/> 「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力」の育成</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 「教員の資質や指導力」の向上</p> <p>日常的な指導の中で「褒める・認める」ことを常に意識できるように、研修会の中で、ポジティブ行動支援の意味や取り組み方を外部講師により指導してもらう。これにより、ポジティブ行動支援の本質的な枠組みを知り、生活指導面だけではなく学習指導の場面においても子どもたちを指導しやすくなると考えられる。</p> <p>≪検証方法≫</p> <p>研修後の感想に追記しているアンケート項目「前回の研修で得た取組を実践していますか」における肯定的回答の割合を毎回80%以上にする。</p> <p>[検証結果と考察]</p> <p>アンケート項目「前回の研修で得た取組を実践していますか」における肯定的回答の割合は100%となり、研修で得た方法や知識を、少しずつだが着実に実践している姿が見取れた。内容別にみると、対保護者対応研修（SC）が最も役立ったと回答しており、次いでいじめ防止対策研修（SSET）、算数科指導研修、国語科指導研修、アレルギーシステム運用前研修と続く。教職員の実践を強化している項目として最も高かったものは「子どもたちの成長が感じられること」と「自分自身の実感」が共に17票であった。これらから、校内研修の充実が教職員の資質向上に大いに効果があると考えられる。</p>
6	研究全体を通した成果と課題	<p>【研究全体を通した成果と課題】 研究発表会等で使用した資料や研究冊子から引用し、端的に記述してください。</p> <p>1. 新規研究（1年目） ※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>成果は4つある。1つ目は、決めた行動目標に対してポジティブ行動支援の枠組を使えば、児童は確実に「できる」ようになるということ。2つ目は、若手教員のスキルアップになるということ。3つ目は校長だけではなく教職員みんなで学校経営方針を作成でき、運用していけるということ。4つ目は保護者や地域と協働できるということ。</p> <p>課題（今後の取組）は3つある。1つ目は学校教育目標から学校全体の行動マトリクスを作成してスクールワイドポジティブ行動支援を推進すること。2つ目はPBS推進委員会を設立し教職員間でポジティブ行動支援が推進できる体制を作ること。3つ目はPBSの枠組を使った学習支援を実施すること。</p> <p>2. 継続研究（2年目） ※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>成果は4つある。1つ目は、昨年度にも書いたが、決めた行動目標に対してポジティブ行動支援の枠組を使えば、児童は確実に「できる」ようになるということ。2つ目は、教職員のキャリアに関わらず、校内研修の充実が教職員のスキルアップになることはもちろん「やる気」にも繋がるということ。3つめは1や2の結果、学校が明るくなるということ。4つ目は保護者や地域と協働できるということ。</p> <p>課題（今後の取組）で最も重要なのは通年でポジティブ行動支援を行うために「行動マトリクス」を完成させることである。</p> <p>3. 継続研究（3年目）</p> <p>≪代表校園長の総評≫</p> <p>1. 新規研究（1年目） ※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>ポジティブ行動支援を土台とした学校経営～若手教員研修から始めるチーム学校～をテーマに実践してきた。確実に若手教員はポジティブ行動支援という指導の方向性を意識した指導ができるようになった。同時にスクールワイドに取組を広げる中で全教職員がポジティブ行動支援を意識して子どもたちに接することができるようになった。前年度と比べると子どもたちの自己肯定感は上がっている。しかし、大阪平均にはまだ達していない。引き続きポジティブ行動支援を実践する必要があると考えている。</p> <p>2. 継続研究（2年目） ※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>今年度も主題を「ポジティブ行動支援を土台とした学校経営」としながら、副題は「～子どもたち・教職員・保護者・地域と共に～」として、スクールワイドポジティブ行動支援を推進してきた。教職員や保護者の中にポジティブ行動支援の意味や方向性は浸透してきたものの、継続的な取組としてはまだ定着していない。来年度は「行動マトリクス」を作成し、継続的にポジティブ行動支援ができる体制を作りたいと考えている。</p> <p>3. 継続研究（3年目）</p>